

武蔵野幕屋日曜聖書講筵 詩篇連続講義 第3回
神の報復
――詩篇第94篇――

1958年2月2日

小池辰雄

復讐の詩篇 高ぶりが罪の根源 神を畏れないことが無知で愚か 霊耳・霊眼・霊言・霊知者
わが足すべりぬと言いつき 義人の苦しみ 罪に対する贖い 神の新しき報い 神の憐れみ
の法則 報復観念のぶち破り 神の報いは聖霊 仇を恩でかえす

【詩篇94】

1 エホバよ仇をかえすは汝にあり 神よあたを報すはなんじにあり ねがわく
は光をはなちたまえ

2 世をさばきたもうものよ 願くは起ちてたかぶる者にそのうくべき報いをな
したまえ

3 エホバよ悪きもの幾何のときを経んとするや あしきもの勝ち誇りていくそ
のとしを経るや

4 かれらはみだりに言をいだして誇りものいうすべて不義をおこなう者はみ
ずから高ぶれり

5 エホバよ彼等はなんじの民をうちくだきなんじの業をそこなう

6 かれらは嫠婦と旅人との生命をうしない孤子をころす

7 かれらはいふやハは見ずヤコブの神はさとらざるべしと

8 民のなかなる無知よなんじらきとれ 愚かなる者よ いずれのときにか智か
らん

9 みを植うるものきくことをせざらんや 目をつくれるもの見ることをせざ
らんや

10 もろもろの国をおしうる者ただすことを為ざらんや 人に知識をあたうる者
しることなからんや

11 エホバは人の思念のむなしきを知りたもう

12 ヤハよなんじの懲めたもう人 なんじの法をおしえらるる人はさいわいな
るかな

13 かかる人をわざわいの日よりのがれしめ 悪きもののために坑のほらるるま
でこれに平安をあたえたまわん



14 そはエホバその民をすてたまわずその嗣業をはなれたまわざるなり
 15 審判はただしにかえり心のおき者はみなその後にしたがわん
 16 誰かわがために起こりたちて悪きものを責めんや 誰か我がために立ちて不義をおこなう者をせめんや

17 もしエホバ我をたすけたまわざりせば わが靈魂はとくに幽寂ところに住まいしならん

18 されどわが足すべりぬといいしとき エホバよなんじの憐憫われをささえたまえり

19 わがうちに憂慮のみつる時なんじの安慰わがたましいを喜ばせたもう
 20 律法をもて害うことをはかる悪の位はなんじに親むことを得んや

21 彼等はいかたうたいて義人のたましいをせめ罪なき血をつみに定む
 22 然はあれどエホバはわがたき櫓わが神はわが避所の磐なりき

23 神はかれらの邪曲をその身におわしめかれらをその悪き事のなかに滅ぼしたまわんわれらの神エホバはこれを滅ぼしたまわん

●復讐の詩篇

1 エホバよ仇をかえすは汝にあり 神よあたを報すはなんじにあり ねがわくは光をはなちたまえ

2 世をさばきたもうものよ 願くは起ちてたかぶる者にそのうべき報いをなしたまえ

非常に著しい言葉であります。「復讐の詩篇」という名前をドイツの学者がつけますが。

「仇をかえすは汝にあり」

仇は貴神がかえし給うと。ユダヤ人のひとつの強い性格が、因果応報的なもの、報いの観念です。これはたしかに、ある意味において、旧新約を貫いてある。ユダヤ人があまり復讐観念が強いので、それで他の民族から嫌われたという事実もあるわけですが。

「エホバよ仇をかえすは汝にあり 神よあたを報すはなんじにあり」

しかし、この詩篇の角度は非常に正しいのでして、「これこれの仇をかえしてください」と願っているのではない。

「報いをなし給うものは貴神にあるので、報いそのものは貴神に一切おまかせ致します」

という角度に出ています。その意味において正しいというわけです。この詩篇を皆さんお読みになって、1節から11節までと、12節から23節までとが、かなり内容が違っていることをお認めになるでしょう。それで、グンケル〔Hermann Gunkel〕だとか、シュミッツ〔Hans Schmidt〕だとか、ドイツの一流の学者が、特にシュミッツなんてのは、A、Bとしてちや



んと分けてしまって、二つの詩篇を一つにしたのだという。それはちよつと考えの行き過ぎだろうと思う。たしかに違っているのですが、やっぱり貫いている。私は勿論これの一つのものと見たい。ただ二つの部分に分かれるということは言えますけれども。この詩篇の成り立ちがいつ頃であるかということは、勿論これは分からないけれども、大体、バビロニヤ捕囚の後であることはまず間違いないところでしょう。

3 エホバよ悪きもの幾何のときを経んとするやあしきもの勝ち誇りていくそのとしを経るや

4 かれらはみだりに言をいだして誇りものいうすべて不義をおこなう者はみずから高ぶれり

5 エホバよ彼等はなんじの民をうちくだきなんじの業をそこなう

6 かれらは嫠婦と旅人との生命をうしない孤子をころす

寡婦、旅人、孤児といった者はいかにあわれむべきであるかということは、預言者たちがよく語っているところですが、やつぱりその響きをここに反響させているわけです。

7 かれらはいふやハは見ずヤコブの神はさとらざるべしと

そういうことを言っている。それからちよつと変りまして、

8 民のなかなる無知よなんじらきとれ愚かなる者よいずれのかにか智からん

9 みみを植うるものきくことをせざらんや目をつくれるもの見ることをせざらんや

10 もろもろの国をおしうる者ただすことを為ざらんや人に知識をあたうる者しることなからんや

11 エホバは人の思念のむなしきを知りたもう

●高ぶりが罪の根源

1 エホバよ仇をかえすは汝にあり神よあたを報すはなんじにありねがわくは光をはなちたまえ

と。いきなり、「光をはなち給え」という様なことを呼んでいるのはちよつと面白いですが、イザヤ書40章をみますと、5節に、

「5 斯てエホバの栄光あらわれ、人みな共にこれを見ん。こはエホバの口より語りたまえるなり。6 声きこゆ云く、よばわれ。答えていう、何とよばわるべきか。いわく人はみな草なり、その栄華はすべて野の花のごとし。7 草はかれ花はしほむ。エホバの息そのうえに吹きければなり。実に民はくさなり。8 草はかれ花はしほむ。然どわれらの神のことばは永遠にたたん。」(イザヤ40・5〜8)

何故、私がここを開いたかというと、イスラエルの民がバビロニヤに捕囚されて、それ



はイスラエルが民族的に、ヤーヴェーの神に不信な在り方をしていたその報いをした罰、即ちその場合には罪に対する報いとして、バビロニア捕囚、国の滅亡という悲運を帰してしまつたわけです。それでその服役の時おわり、咎^{とが}ゆるされて――大体70年間ですが、このバビロニア捕囚の時代を経まして――今、神さまは現われた。即ち、栄光をもつて現われた。バビロニア捕囚から帰つてきて、そして、イスラエルの、例えば今の5節の、

5 エホバよ彼等は何んじの民をうちくだきなんじの業^{もちもの}をそこなう⁶ かれらは
は嫠婦^{やもめ}と旅人との生命をうしない孤子^{みなしこ}をころす

イスラエルの民は悲運にあつたことは、確かに彼ら（他の諸民族）が汝の民即ち私たちをうちくだき、汝の持ち物をそこなつた。そして、やもめ、旅人、孤児を殺すという、相変わらず不当な苦しめをしている。アッシリヤとかバビロニアとかいうのは――もちろん彼らは知らずして神の道具にはなつていますけれども――彼ら自身はやはり悪を行つてゐるわけです。それに対して、民族として――これは相当民族的な角度が94篇の前半は強いと思う――不当な苦しみに悩んでいるわけです。それで、彼らは自分たちが罪を犯したということに対する当然の神の報いは受けた。それから解放されてきた。しかし、なお自分たちは苦しみの中にあるものですから、

「ねがわくは光をはなち給え。エホバよ、現われてください」

と。第二イザヤから第三イザヤにかけては、特に第三イザヤは、神殿が建築されたあとのイザヤ書56章以下のところにおいて、栄光の神のことを非常に待ち望んでいます。そういうような現実において、この詩篇がうたわれているとするならば、確かに、

「ねがわくは光をはなち給え。エホバ栄光をもて現われ給え」

ということ祈つてゐることが、唐突のようですが、やはり非常に深い消息を現わしていると思う。そして彼らは、何に対しても高ぶるものである。即ち、

「願くは起^たちてたかぶる者にそのうくべき報いをなしたまえ」

「すべて不義をおこなう者はみずから高ぶれり」

と。「傲慢」はギリシヤ語でいう「ヒブリス」です。高慢というのは罪の最大のものです。「高ぶり」という罪は神への反逆。神を神としてあがめないことは人間の根源的な高ぶりであります。

まあ近代人は皆その高ぶりを持つてゐる。実はこの高ぶりが罪の根源なんです。人の上に神あることを真に畏^{おそ}れない。私は、これが近代文化の一切の狂いのもとであるとはつきり言いたい。そういつた――この場合にはバビロニア、アッシリヤといったような大国、また西にはエジプトもあります――その高ぶりに対して歴史的な審判をしてくださいと。これは即ち、

「仇^{あた}をかえすは汝にあり」

という非常に大きな民族的な祈りであると思う。そこで三度繰り返されて、



「^{あた}仇をかえすは汝にあり、^{かえ}あたを報すはなんじにあり、^{たか}たかぶる者にそのうくべき報いをなしたまえ」

と。イスラエルの民は不信で碎かれた。そしてとにかく、神さまに一応立ち戻りました。けれども、神の道具となつてイスラエルを打ったアッシリヤ、バビロニヤというものはやはり高ぶっている。高ぶりは勿論、アッシリヤは亡ぼされ、バビロニヤもやがてペルシヤに亡ぼされはしたけれども、やはり神の審判は歴史の上にも表われて来る。高ぶりは必ず亡びる。ナポレオンも没落し、ヒットラーもひっくり返った。すべて傲慢な魂は、その末路は悲惨なものです。個人にしても社会的な意味においても、国家的においても、高ぶりというものは非常に恐ろしいので、これは「箴言」の中にも有名な言葉がある。8章13節に、¹³「エホバを畏るるとは悪を憎むことなり 我は傲慢と驕奢 惡道と虚偽の口とを憎む」(箴言8・13)

16章18節に、

「¹⁸驕傲は滅亡にさきだち誇る心は傾跌にさきだつ ¹⁹卑き者に交りて謙だるは^{たか}驕ぶる者と^{とも}偕にありて^{えもの}賊物をわかつに愈る」(箴言16・18、19)

とある。「生者必滅」というあの「生者」の「生」の字がそういったものを意味する。それは「必滅」です。箴言21章4節にも、

「⁴高ぶる目と驕る心とは悪人の光にしてただ罪のみ」(箴言21・4)

大いに光っているようだが、ただそれは罪に過ぎないというのがこの「高ぶり」です。

⁵エホバよ彼等は何んじの民をうちくだきなんじの業をそこなう

パウロがサウロであったとき、彼は非常におごり高ぶっている。己を義としていた。そこでイエスを信ずる者たちを迫害していた。即ち、「汝の民」を迫害していた。そうしたら、復活のキリストが、

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか！」

と。即ち、イエスを信じている者たちを攻め迫害することは、このキリストを攻めることである。かくして、サウロにキリストは立ち向かいました。あの場合、復讐というものは、一応サウロを引っくり返した。サウロを引っくり返したけれども、キリストの復讐は素晴らしい復讐でありまして、これはサウロを亡ぼしたのではなくて、このサウロを捕まえて逆に彼をすっかりその高ぶりから碎けに、謙りに彼の魂を変えてしまった。打つことによって謙りに彼の魂を変えて、今度は逆にサウロを生かし、神の栄光のために使うというのがキリストの復讐であつた。

●神を畏れないことが無知で愚か

⁵エホバよ彼等は何んじの民をうちくだきなんじの業をそこなう

⁶かれらは贅婦と旅人との生命をうしない孤子をころす



7 かれらはいふヤハは見ずヤコブの神はさとらざるべしと

8 民のなかなる無知しれものよなんじらさとれ 愚かなる者よ いずれのときにか智かしこか

らん

といつて、この詩篇の作者は、いかに彼らが霊的な無知であり、霊的な愚者であるかをす
るどく宣言している。「無知」「愚か」というのは勿論、「神を神として畏おそれない」のがユダ
ヤ人においては無知であり愚かである。知的にただ無知とか愚かを用いのではない。そこ
がヘブライ人の非常に大事な自覚なので、「神を畏れない」ことが無知であり愚かであり、
神のことを思索したり考えたりするような意味における「知」ではない。

実存的にこれを知る、「実存知」です、ね、いうならば。実際に自分の生活をもつて、体験をもつ
て神を知ることが本当の「知」であつて、そうでないものは愚かである。だから、今の文
化人はみな無知、愚かです。大いにその知がある賢者と思つていられるけれども、この実存の
角度からいうと無知であり愚かな人です。だから、愚かなることをする。戦争という一番
愚かなことをする。戦争というのとは一番愚かなことです。知的にはわかつていいる。戦争は
いかに悲惨であり、いろんな損害をきたすかというようなことは知的にはわかつて、大い
に賢なるようだが、実は本当の賢でないものだから、それを犯す。これが人間の愚かさだ
から、愚かさとは同じことになる。

9 みみを植うるものきくことをせざらんや 目をつくれるもの見ることをせざ

らんや

人間に耳を与えている者が聞くことをせざらんや。彼ら傲慢な者たちは、

「神さまは聞いてないから、分からないから、勝手にやれ」

と思つているようだが、我々の耳を造つたところの者は、この神は人間にはどんなに聞こ
えなくても、神は「霊耳」をもち給う。霊の耳をもつて、どんなささやきもちやんと聞い
ておられる。「壁に耳あり」というけれども、神さまは「霊耳」をもつて聞く。また目を造
れる者の霊眼をもつて見ておられる。どんなに人が見ていないところでも、神の霊眼は見
ておられる。

10 もろもろの国をおしうる者ただすことを為せざらんや

霊の言をもつて語つていいる者――もろは つるぎ 霊言でも霊語でもよい――その霊言をもつてただすこと
をしないだろうか。両刃の剣の如き言葉である。

人に知識をあたうる者しることなからんや

神、霊知者、これが神さまです。「霊耳・霊眼・霊言・霊知」者である。霊の知をもつて知り、
霊の言をもつて語り、霊の眼をもつて見、霊の耳をもつて聞いておられる。詩篇130篇にあ
る通り、人間は神の前を離れることも、隠れることもできない。私たちがこの「霊耳・霊眼・
霊知」者、神、キリストを、この御臨在を本当に受けとること。「信ずる」とは、そういう
方であるという命題を信じたつて、これは仕様がな。普通のクリスチャンは、そういう



た命題を信じていて、

「なるほど、神さまは全知全能だからすべてを知っている」

という。そういったことを三人称的に悟り信じているくらいが、普通の信仰ですが。それを本当に、じかじかに「霊耳・霊眼・霊知」者であることを私たちが、じかじかに本当に受けとりながら歩いていたら、もう自分は傍観的な角度には居れない。もう神さまの前には、罪を犯しやすい、傷つきやすい、倒れやすい、けがれの自分というものは、砕けの何か何ものでもなくなる。

「私はこの通りの者で、ダメなものでございます」

というよりほか仕様がなない。この「霊耳・霊眼・霊知」者の前に自分をそれに耐えようといくら澄ましたって、これはダメです。これに耐えんとしてすましたって、これはもうくたびれてしまうし、24時間そんなことは続かない。とても人間にとっては不可能な現実です、そういう神さまの現実の前には。けれども、神さまは審判者の、責める者、所謂ただ検事的な神ではない。神さまの耳も目も心も、それはその前には隠れなく一応審きは受けまされども、こちらの魂が砕けの角度をもつて行くなれば、決しておそろしい神ではない。

神を畏れるというのは、こわがることではない。畏れ親しむことなんです。「畏親」という言葉があるかどうか知りませんが、畏れ親しむこと。これは砕けの魂をもつて行く。畏れ親しむのでなければ神さまとの交わりはできない。この親しみが出てこなかったら守りはできない。

●霊耳・霊眼・霊言・霊知者

11 エホバは人の思念のむなしきを知りたもう

いかに人間はそれ自体が空しきものであるか。これもさっきのイザヤ書に出てきます。イザヤ書の同じ40章のところに、ちょうど似たような言葉があります。12節、

「12 たれか掌心^{たなごころ}をもてもろもろの水をはかり指をのばして天をはかり、また地の塵を量器^{ます}にもり天秤^{てんびん}をもてもろもろの山をはかり権衡^{はかり}をもてもろもろの岡をはかりしや。

誰がこの大自然を計ることができるか。今の自然科学は相当計りはしますがね。

13 誰かエホバの霊をみちびきその議士となりて教えしや。

神の霊を誰が導くか、神のはかり人となつて神さまに誰が教えたか。まるで反対だと。14 エホバは誰とともに議り^{はか}たましいや。たれかエホバを聴く^{きこ}しこれに公平の道をまなばせ、知識をあたえ^{さとし}明通のみちを示したりしや。

みな反対で、そんなことをしたのはみな神さまではないか。

15 視よもろもろの国民は桶^くのひとしづくのごとく、権衡^{はかり}のちりのごとくに思いたもう。島々はたちのぼる塵埃^{ほこり}のごとし。16 レバノンは柴^{たき}にたらずそのな



かの獣は燔祭にたらず。17 エホバの前にはもろもろの国民みななきにひとし。
エホバはかれら^{はんさい}を無きもののごとく空^{むなし}きもののごとく思いたもう。」(イザヤ
40・11〜17)

この「無き」とか「空し」という字、「空無」、その価値がいかにないか、どこまでもそうした実存的な意味です。無価値なもの、私たちが

「無者」

というのも、実に価値なきもので、瞑想してただ空無に、「空無」「虚無」にかえることを「無」というのではない。間違わないようにしてくださいよ。私がこの「無者」というような言葉を使うのは、神の前に価値なきもの、一点の価値なきものとしての自覚です。即ち、

「霊の貧しき者」

という自覚です、無者というのは。

「空しい者の如く思い給う」

というんですから、本当にこちらが空しくなればいい。空しくなれば、神さまは空しく思わない。ところが、空しくなく大いに有ると思っていると、有者だと思っていると、

「そんな人間的な有なんてものは空しいものだ」

と神さまは思っていられしやると、そういうわけです。それは誇りだから、そういった自分を「エトバス」「サムシング」「何ものか」と思うことは、神さまの方からみると空しい。ところが、本当に碎けて空しくなっていると、神さまはその無者の空しさにおいて実は、素晴らしいものを逆に見てくださる。

本当に自分を空しきものとして生きた人が、いつも申し上げている通り、ナザレのイエス・キリストです。彼は空しきものとして生きていた。イエスこそは空しきものの最大なものです。だから、私は言っている。

「恩恵とはこの無を賜うことである。この無を賜うと、そこに神の無限が働き出してくださるからである」

と。「霊耳・霊眼・霊言・霊知」者の前に行くと、霊知者は空しきものと思ってくださいるか——私はこの詩篇の言葉を逆用するんですよ——私たちは本当に自分を自ら本当に空しき者と自覚する時に、この「霊耳・霊眼・霊言・霊知」が私たちの中につてくる。そして、神の耳をもて聞き、神の目をもつて見、神の言葉をもつて語り、神の智慧をもつてものを考えていくということが、この空しさにおいて現われてくるわけです。だから、この詩篇の言葉をそういうように、このキリストによって逆光線を与えると、えらい言葉になる。誰もそんな註解はしませんけれども、そういうことになる。

「エホバは人の思いの空しきを知り給う」

という言葉が逆に恩恵となつて、私たちがいかに空しさを神さまは知ってくださいるから、「ああそうか、とんでもない間違いだった、自分は何者かと思つたが、こいつはい



かん、自分を空しいものと本当と思う」

ということになったならば、

「人に知識をあたうる者しることなからんや」

と。「人に知識を与うるもの」と書いてある。神さまはその知識を与えてくださる。その耳を与え、言葉を与え、その目を与えてくださるということになる、こちらが空しければ。

9 みみを植うるものきくことをせざらんや 目をつくれるもの見ることをせざらんや¹⁰ もろもろの国をおしうる者ただすことを為ざらんや 人に知識をあたうる者しることなからんや¹¹ エホバは人の思念のむなしきを知りたもう

12 ヤハよなんじの懲めたもう人なんじの法をおしえらるる人はさいわいなるかな

法を教えられても、法が自分の中に入るためには法に従って、鍛えられなければならない。それはこらしめです、鍛える。この「靈法」、神の靈なる法則、これはただ知的に学んだって仕様がなない。皆さんも聖書をよく読んで覚えることも大事なことです。大いにやってください——ああ今日は暗誦するのを忘れてしまいましたね、あとでもいいよ——その法を頭で覚えるばかりでなくて、身に覚え、身につける——「身に覚えがある」なんていうけれども——身に覚え、身につけるためには神さまに鍛えられなければ、この靈法が身につかない。即ちどういうことかという、その靈法に——私はよく「乗つかる」というが、つばめが風に乗つかるように——その靈法に乗つかるためには、そこに一つの自己との戦い、己の法則に対する戦いがある。己の法則に、自己の我が法則に打ち勝たなくては。

「わが則にあらず、汝の則を」

というんですから、どうしてもそこには鍛えがある。そういう意味において、「こらしめを受ける者」と、「汝の教えを教えられる、汝の法を教えられる者」とは離すことのできない概念になっている。詩篇の言葉はただあやで言っているのではなくて、そういうように補いながら言わないと、相呼応して言わないと、完全な意味が出てこない。

13 かかる人をわざわいの日よりのがれしめ 悪きもののために坑のほらるるま¹⁴ でこれに平安をあたえたまわん

詩篇の16篇10節に、

「¹⁰そは汝わがたましひを陰府にすておきたまわす なんじの聖者を墓のなかに朽ちしめたまわざる可ければなり」(詩篇16・10)

墓とか陰府とか穴とか、これは同じ概念です。この「坑」というのはそういう意味です。

14 そはエホバその民をすてたまわす その嗣業をはなれたまわざるなり

「民」と「嗣業」という。これも今の詩篇16篇に出ている。5節に、

「⁵エホバはわが嗣業またわが酒杯にうくべき有なり なんじはわが所領をまもりたまわん」(詩篇16・5)



ここでは「エホバはイスラエルの民の嗣業である」というような言い方をしています。これは申命記18章1節に、

「祭司たるレビ人およびレビの支派は都てイスラエルの中に分なく産業なし
彼らはエホバの火祭の品とその産業の物を食うべし」(申命記18・1)

エホバが即ちこの嗣業である、産業である、受くべき者である、という。

「エホバこれが産業たり」

とは強い言い方ですが、神に供えられたるものが彼らの嗣業である。そこで「神が彼らの嗣業である」という霊的な意味になるわけですが、それはイスラエルの民のうちの特に祭司的な役割を果たす者たち、レビ人の族がそうである。それからまた、それが更に延長されて、イスラエルの民が即ちエホバの民であり、同時にエホバの嗣業である、といったような相互的に深い関係にこの「嗣業」という言葉が使われている。

「汝はわが民」

「汝はわが神なりと言わん」

なんてよく預言者の中の大事なところに出てくる。黙示録にもそうですが、同じ概念をもつて互いに名指すような言い方です。そのように深く「エホバの者である」という。

「我らは汝のものである」

という、それがこの嗣業です。

●わが足すべりぬと言いつき

15 審判はただしきにかえり心のなおき者はみなその後にしたがわん

16 誰かわがために起こりたちて悪きものを責めんや 誰か我がために立ちて不義をおこなう者をせめんや

これはもう信頼の言葉が反語的に非常に響いているわけです。それから個人的体験に行きまして、

17 もしエホバ我をたすけたまわざりせばわが靈魂はとくに幽寂ところに住まいしならん

18 されどわが足すべりぬと言いつき エホバよなんじの憐憫われをささえた

まえり

19 わがうちに憂慮のみつる時なんじの安慰わがたましいを喜ばせたもう

これは皆さんが自分の今までの生涯において、また信仰生活において、こういった言葉がいかに思い当たる言葉であり、慰めの深い言葉であるかと思う。

「されどわが足すべりぬと言いつき エホバよなんじの憐憫われをささえた
まえり」

という言葉です。この神のあわれみが、すべてた時に谷底に落つこちないで、神さまのあ



われみがこの儉涯けんがいにそつと、自分の九死に一生を支えてくださる。

原田君あたりも南方でほとんど九十九死に一生みたいなところを助けられてきた。皆さんの中にもそういういった体験を、特に戦争の時なんかなさったことがあるでしょう。

これがまた非常に普通の生活においても、

「わが足すべりぬといひしとき」

それが具体的なことであろうと、また魂の事態のことでありましょうと、

「エホバなんじの憐憫あわれみわれを助け給えり」

詩篇というような祈りの世界が、決して論理的に展開しないで急にこういったように個人体験が現われたりしてきているところに、かえって詩篇が生きているゆえんがある。

ドイツ人というのはすぐ論理的に考えたがる方で困るのですが、その点においてはむしろ我々東洋人の方が、弾力性をもつてこれを掴つかむことができるのではないかと思う。

20 おきて律法をもつて害そこなうことをはかる悪の位はなんじに親したむことを得んや

この20節は、学者がちよつと困る節でして、いろいろ説があるので、日本語を読んでもわからんです。

「亡びの座が汝と契約を結ぶならば、わがわいは義に対して形成される」とか、

「亡び」というものが主権を握るならば、一緒に汝、神さまと契約を結ぶならば、わがわいが義とかいつて逆に亡ぼすようなことになる」

というような意味で訳していますが。わかるような、わからないような言葉です。まあこういうような原典批判の問題は学者一人ひとりいろんな訳をつけてしまうので、ちよつとわかりませんが、20節はお預けにしておきます。

21 彼等はいかたういて義人のたましいをせめ罪なき血をつみに定む
大体、21節をみても20節はそういった悪の主権の角度を言っているらしい。

22 然はあれどエホバはわがたかき櫓やぐらわが神はわが避所さけどころの磐いわなりき

23 神はかれらの邪曲よこしまをその身におわしめかれらをその悪あしき事のなかに滅ぼし
たまわんわれらの神エホバはこれを滅したまわん

要するに、悪しき者、神の義に逆らっているところ者は、やがて亡びるだろうし、また我々は神を避所としてこれに依り頼む、という結論になっているわけです。

●義人の苦しみ

それで、この94篇を素材にして、私たちは「神の報い」「報復」ということを、全聖書をまた新約の光をもつて学びかえしてみたいと思う。少しく旧約の個所に当たってみますと、ヨブ記は義人の苦しみを語っているところで、それを問題としていているところですが、ヨブ記の34章10節、



「¹⁰然ばなんじら心ある人々よ我に聴け 神は悪を為すこと決めて無く 全能者は不義を行うこと決めて無し¹¹ 却つて人の所為をその身に報い 人をしてその行為にしたがいて獲るところあらしめたもう」(ヨブ34・10～11)

32章から37章まではエリフという、ヨブの三人の友達の他の或る一人の若い人物が現われてきて、ヨブに対してものを言っているところです。これは何もエリフにおいて新しい言葉ではない。大いに三人の人たちも言つて、

「ヨブがこんな艱難にあつてゐるのは、何かお前は悪いことをしたんだろう、罪に對する罰として報いとして、ヨブの苦難が来ている」

という角度で大いにヨブをなじつてゐる角度が多いわけです。このエリフの言葉もやはり、このところにおいては、そういう角度でもつて言っている。これがある意味において、旧約に流れているところの一つのトーン(調子)——一つのですよ——でもあるわけです。そういった調子は方々にあります。ホゼア書12章2節、原文でいうと12章3節に、

「²エホバはユダと争弁をなしたもう ヤコブをその途にしたがいて罰しその行為にしたがいて報いたもう」(ホセア12・2)

神さまは行いに従つてみな報いをなす。例えば、歴代志略下の6章23節でも、

「²³汝天より聴きて行い 汝の僕等を鞠き 悪き者に返報をなしてその道をその首に帰し 義者を義としてその義にしたがいて之を待いたまえ」(歴代志略下6・23)

悪しき者にはその惡の報いをする。これはソロモンの祈りの中の一節です。それから詩篇の18篇20節から、

「²⁰エホバはわが正義にしたがいて恩賜をたまひ わが手のきよきにしがいて報賞をたれたまえり²¹ われエホバの道をまもり 惡をなしてわが神よりはなれしことなければなり²² そのすべての審判はわがまえにありて われその律法をすてしことなければなり²³ われ神にむかいて欠くところなく 己をまもりて不義をはなれたり²⁴ この故にエホバはわがただしきとその目前にわが手のきよきとにしたがいて我にむくいをなし給えり²⁵ なんじ憐憫あるものには憐みあるものとなり 完全ものには全きものとなり²⁶ 全きよきものには潔きものとなり 僻むものにはひがむ者となりたもう」(詩篇18・20～26)

「なんじ憐憫あるものには憐みあるものとなり 完全ものには全きものとなり。きよきものには潔きものとなり 僻むものにはひがむ者となりたもう」

という著しい言葉がある。こういったように、神さまはその相手のものに応ずる。これも一つの報いの角度です。この、

「憐憫あるものには憐みあるものとなり 完全ものには全きものとなる」

という「あわれみ、全きもの」という言葉はキリストがあつた、



「汝の父の全きが如く全かれ」
まった

「父の慈悲なるが如く慈悲なれ」

と、片方はマタイ伝で、他方はルカ伝で言っている。あの言葉がちょうど、この詩篇の18篇の25節がその元みたいです。まるで、

「あわれみある者にはあわれみある者となり、全き者には全き者となれ」

「神の全きが如く全かれ」

「慈悲なるが如く慈悲なれ」

「清き者には清き者、ひがむ者にはひがむ者となる」

そういった、相応じてする。それは出エジプト記の21章に出ている有名な言葉です。21章23節、

「²³もし害ある時は生命にて生命を償い ²⁴目にて目を償い 歯にて歯を償い 手にて手を償い 足にて足を償い ²⁵烙にて烙を償い 傷にて傷を償い 打傷にて打傷を償うべし」(出エジプト21・23、25)

人が生命をそこなったら生命をもつて復讐する。これはまさに日本でもある。「仇討ち」というのがそれです。

「目にて目を償い 歯にて歯を償い」

歯を折つたら向こうの歯を折つてやる。

「手にて手を償い 足にて足を償い ²⁵烙にて烙を償い 傷にて傷を償い 打傷にて打傷を償うべし」

という。その前の節に、

「²²人もし相争いて妊める婦を撃ちその子を墮させんに別に害なき時は必ずその婦人の夫の要むる所にしたがいて刑られ法官の定むる所を為すべし」

これは何か民法、民事のいろんなことが書いてある。申命記19章21節にもあった。

「²¹汝憫み視ることをすべからず 生命は生命 眼は眼 歯は歯 手は手 足は足をもて償わしむべし」(申命記19・21)

そんな調子なわけですね。

●罪に対する贖い

申命記32章35節以下をちよつと見てください。申命記32章というのはモーセがイスラエルの民に言ったときされる有名な演説のなかです。

「³⁵彼らの足の蹠かん時に我仇をかえし応報をなさん その災禍の日は近く 其のために備えられたる事は迅速にいたる ³⁶エホバついにその民を鞫き またその僕に憐憫をくわえたまわん 其は彼らの力のすでに去りうせて繋がれたる者も繋がれざる者もあらずなれるを見たまえばなり ³⁷エホバ言いたまわん 彼ら



の神々は何処いずこにおるや 彼らが頼める磐いわは何処ぞや 38 即ちその犠牲いけにえの膏油あぶらを食
いその灌祭かんさいの酒を飲のみたる者は何処におるや 其等をして起たちて汝らを助けし
め汝らを護らしめよ 39 汝ら今觀よ 我こそは彼なり 我の外には神なし 殺すこ
と活かすこと撃つこと愈いやすことは凡て我是を為す 我手より救い出すことを得
る者あらず 40 我天にむかいて手をあげて言う 我は永遠とこしなえに活いきく 41 我わが閃爍きらめ
く刃やいばを磨とぎ 審判さばをわが手に握る時はかならず仇をわが敵にかえし 我を惡にくむ者
に返報むくいをなさん 42 我わが箭やをして血に酔わしめ 吾劍こがねをして肉を食わしめん 即
ち殺さるる者と擲とらるる者の血を之に飲ませ 敵の髪おおき首くうべの肉をこれに
食わせん 43 国々の民よ 汝らエホバの民のために歓悦よろこびをなせ 其はエホバその僕
の血のために返報むくいをなしその敵に仇をかえしその地とその民の汚穢けがれをのぞき
たまえばなり」(申命記32・35〜43)

まあ凄いことが書いてある。こんな物凄い文句があるものですから、ユダヤ人はある意
味において嫌われる。そういう「徹底的な報いをする」ということを、神さまが言ったと
いうような具合で書いてありますから。

「罪に対する贖い」ということが血の贖いとなるが、そういった復讐、報いの概念の一つ
の現われです。だから、人間の罪に対してただそれを大慈大悲的にゆるすわけにいかない。
罪の贖いがされなければならぬ。その罪の贖いを結局このようにやったのが、キリスト
の十字架であるということ。私たちがこれを聞くと、報いという報復観念というものはあ
まり気持ちのいいものではないけれども、とにかく正しきものは正しきように、罪なるもの
は罪のように、これはやっぱり一つの報いというのは法則の現われなんです。法の現われ
なんです。法がどのように、いい加減にされないで現われていくか、風が吹けば木の葉が
動くように、悪しきことをすれば、その実は悪しき実によってそれがわかり、正しきこと
をすれば正しき実がそこに現われ、そういうように現象して因果応報的な角度で、罪とい
う因があれば罰という果がある。罪という因があれば死という、

「罪の価は死なり」

「死」という「報い」が来てしまう。ところが、どうしても罪は放っておけない、死が来
るから。しかしその死は、罪を消すためにどうしても特別な手段が、道がなければならぬ。
そこに償つぐない、贖あがないという概念が出てくるわけです。だから、罪を贖う「贖罪」、罪の実を自
分が引き受けてしまう。だから、この贖罪というのはどうしてもユダヤの宗教、民族の中
から、このキリストの十字架が遂に現われたというのは、やっぱりこれも一つの必然であつ
たんです、贖罪というものは。けれども、この贖罪はただ自然的必然ではない。人間が亡
びることは自然の必然です、

「罪の価は死なり」

だから。けれども、その死を引っくり返してそれを償いとる、というところにこの報いと



いうものが、神の報いというものが、或る一つの違った法則が——やっぱり法則は法則なんだが——現われてきた。これがこの「贖罪」ということです。

●神の新しい報い

マタイ伝5章を開いてください。5章から7章の山上の垂訓のところに神の報いということが書かれている。神の新しい報いとはどのようなものであるか。人間がただ、

「復讐をしてください」

といって祈っているようなら、それは或る意味において旧約の角度なんです。けれども、

「仇をなすは汝にあり」

といって詩篇の94篇でとにかく、「汝にあり」と言っつてすっかり任せているところに或るいい方向が表われている。それは内容的にははつきりしていませんけれども。その新しい報い——今度は神の報いは外的な報いといつてもいいですが——正に新しい報いです。神らしき報いというのは、どういうものであるか。これには現われが、こちらからの在り方に二通りあつて——二通りといつてしまうのは言い過ぎかも知りませんが——まあ結局、或る角度からは一つになつてしまふんですが。

「幸なるかな霊の貧しき者 天国はその人のものなり」

と、以下言っているところで最初に、

「喜べ喜べ（喜びおどれ）。天にて汝らの報いは大いなり。汝らより先にありし

預言者もかく責めたりき」

何かえらいことをすれば大いにその霊が豊かで、いわゆる霊的であつてみたりするようなことなら、神さまは大いに褒めなさるかと思つたら、キリストは開口一番に何と言つたかという、

「霊が貧しい」

と言つた。

「どうも私は仕様がないう者です。躓いたり転んだりします。一向どうも駄目な存在です」

と言つて自分が碎ける。……ルカ伝15章に出てくる放蕩息子の話で兄はこの弟を、

「けしからん。親爺は、あんな身代をすつからかんにして遊びほうけていた奴を大いに迎えている。けしからん」

というわけで、道德の世界から見れば確かにそうです。けれども、魂の在り方からいうと、弟はそれをよしとして帰つて来たのではない。

「自分は本当に悪かつた。本当に私はマイナスのものです」

といつて帰つてきた。そうしたらば、神さまはこれに天国を、プラスを下さる。

「私はプラスだ」



と思っていると、神さまは、

「それはいかん、マイナスだ」

という。マイナスとプラスはこういうことになる。自分がどんなによくても、それをプラスと思うことは、それ自体が罪なんです。ただ何をしようが、どんなに出来ようが、

「これは神さまがさせたのである。私の何ものでもない」

と。それは即ち「霊の貧しき者」です。大いに失敗しても、どん底に貧しくなくても、大いにいろんなことをやっても、

「それは私でない、絶対に私ではない、これは神さまがさせている」

と――体裁ではないよ――本当に魂の奥底からそういうように受けとっている人は、神さまはそこに天国を下さる。自分がマイナスであろうとプラスであろうと、とにかく自分を本当にゼロとして受けとる。私たちは結局、ゼロとして自分を受けとって――自分がマイナスであろうとプラスであろうと――本当にこのゼロになっていないなくては。

「どうもこんなマイナスですから、とても神さまの前に出られません」

なんていつて、出てこない謙遜な人があるが、それはダメです。

「自分はマイナスですから、神さま、仕方がありません」

いつて、出て来なくてはいかん。

「どうも、私はこの頃具合が悪いから、集会は敷居が少し高いから行きません」

なんて、それはいけません。皆さん、行き詰まったりして、

「小池先生のところへ行くには少し敷居が高いから」

といって来ない人がありますが、敷居が高くも何もない。私のところは敷居がまことに低いんですから（一同笑い）。もうマイナスでもプラスでも、そんな自分のマイナス・プラスなんてのは神さまの目からはゼロですよ。だから、

「無き者と思ひ給う」

と思われているから、

「はい、私は無き者でございます」

と、この「無き者」になって、自分がダメだからいよいよ出て行く。いよいよ神さまが恵みを下されば、

「これは神さまのものである」

といって、いよいよ出ていく。どっちにしろ、さっき言った二通りある。その二つは結局一つなんです。

そうして、神の前にこの「無」となって出ていくところに「天国」という「報い」が来ます。報いはただちに恩恵です。これは要するに何ものでもないのだから。これが原因となってきたのではないのだから。そういう在り方に対するところの神さまの恵みの意志なんです。これが神さまの報いなんです。



「悲しむ者、その人は慰められん」

「柔和なる者、その人は地を嗣^つがん」

「義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん」

「あわれみある者、その人はあわれみを得ん」

と。さつきの、

「²⁵なんじ憐憫^{あわれみ}あるものには憐みあるものとなり 完全^{まった}ものには全きものとなり

²⁶きよきものには潔きものとなり 僻^{ひが}むものにはひがむ者となりたもう」(詩篇

18・25〜26)

というわけです。これが神的な報い。さつきのあの言葉は非常に大事な言葉でしたが、

「幸いなるかな心の清き者、その人は神をみん」

心の清き者とは、やっぱり自分を何かとぎすますようなことではないですよ。自分を結局、投げ出すことが、心が清くされることなんですから。

「幸いなるかな平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん」

「幸いなるかな義の為に責められたる者、天国はその人のものなり」

何故、「幸いなるかな、幸いなるかな」と言われるかというと、神さまの神的な報いがこのように来るからです。始めからキリストの教えがそういった神的な報復の救い、神的な報いを言っているんです、神的な恵みを。

これに対する在り方は結局、哀しんでいる者も、柔和なる者も、心の清き者も、義に飢え渴く者も、いろいろな現象、心の現象はいろいろですけども、それは結局、一番先の

「霊の貧しき者」

そこに帰せられる。それからみな発するんです、こういういろいろの角度は。だから、山上の垂訓の第1節というのは、もう絶対にこれは福音なんです。これはすべてそういったいろいろな心の場合に出てくる。霊が貧しいから、本当に神の義に飢え渴く。霊が貧しいから、本当に心が清くなる。霊が貧しいから、真に悲しみが悲しみとして神に向かっているんです。そういうわけですよ。だから、

「義の為に責められたる者、天国はその人のものなり」

義に飢え渴くとき、その神の義が彼に来ていますから、これによって今度は責められる。天国はその人のものである。それでさつきの祈りのところでもそうです。

「隠れたるに見給う汝の父は報い給わん」

「施しをなす時、右の手のすることを左の手に知らすな」

知らせたら、もう既に報いを得たものである。この報復観念というものが…(録音切れ)…

●神の憐れみの法則

私はとにかく罪人^{つみびと}である。死は来る。神の法則には狂いがない。そうなんです。だから、「キ



リストはこのところはどうしてくれるか」というわけです。マタイ伝の25章でいろいろな、「わが父に祝せられた者よ」とある。34節以下のところですが、

「³⁴ここに王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創^{はじめ}より汝等のために備えられたる国を嗣^つげ。³⁵なんじら我が飢えしときに食^{くら}わせ、渴^{かわ}きしときに飲^のませ、旅人なりし時に宿^{しゆく}らせ、³⁶裸^{はだか}なりしときに衣^きせ、病^{やま}みしときに訪^{とづら}い、獄^{いどや}に在^ありしときに来^{きた}りたればなり」³⁷ここに、正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食^くわせ、渴^{かわ}きしを見て飲^のませし。

ここに正しき者の言うのに、「私はいつあなたが飢えたのを見て食^くらわせたか」と言っている。その正しき者は自分の善行をちつとも数えていない。

⁴⁰王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になしたるは、即ち我に為^なしたるなり」

と、「それは即ち神・キリストにしたことである」といつて、「この天国を嗣^つげ」と言う。片方は「のろわれたる者よ」といつて、

⁴¹かくてまた左におる者どもに言わん「詛^{のろ}われたる者よ、我を離れて悪魔とその使いらとのために備えられたる永遠の火に入れ。

「いつしなかったか」と言つたらば、「いや実にいと小さき者になさなかったのは我になさざるなり」と、45節に書いてある。

⁴⁵ここに王こたえて言わん「誠になんじらに告ぐ、此等のいと小さきものの一人に為^なさざりしは、即ち我になさざりしなり」と。⁴⁶かくて、これらの者は去りて永遠の刑罰にいり、正しき者は永遠の生命に入らん』（マタイ25・34、⁴⁶）

そのように我々の実存がその次の世界を決定する。

「さあ困つたなあ」

というわけですね。もし私たちの神さまへの直接の関係において、「私たちの実存が決定する」とするならば、まあ少なくとも私は落第です。実存が決定するなら私は落第なんです、私が結局いろいろなものを計算してみると、どうもマイナスである。だんだん谷底に落ちて行く。

ところが、いよいよ谷底に落ちるきわで、「わが足すべりぬと言うときに」さつきの詩篇94篇、

「わが足すべりぬと言う時、見よ汝の十字架われを支え給えり」

と。十字架の木に引つ掛かつて私は支えられて今度は山を登ることができるようになる。

「わが足すべりぬと言う時に、見よ汝われを支え給えり」

で、そういう躓き、滑り、転び、倒れという時に、キリストのみ手は私を支えてくださる。



どこで躓いても、どこで転んでも、そこにキリストのみ手がある。

私はこの間、清瀬で言いました。キリストが海の上を、波の上を渡って来られた。ペテロはこれに向かつて、

「ああ、あなたでしたか!」

と言って、波の上を進んで行った。けれども、その信頼が途中でくずれて、風を見たらば、風を恐れてペテロは沈みかかった。

「主よ、あわれみ給え!」

と彼は叫んだ。それでペテロをつかまえて、これを舟の中につれ戻してやった。

普通の註解者なんかは、これを「レゲンデ」[Legende 伝説、聖徒物語]「宗教的物語」とするでしょう。けれども、物語ではない。これは事実として、福音書のこの様な素晴らしき現実を本当にキリストの驚くべきあわれみの力の生命の現実として受けとらなかつたらば、信仰生活には本当の力は正直、来ないんです。それを物語としたり、比喻として考えている人は結構です、どうお読みになろうとご自由です。けれども、私にはこの波の中に沈みかかっている私を捕まえて、ペテロの如くつかまえて引き上げてくださるこのキリストがいらっしゃるから、私はとにかく躓いても転んでも、この山を登ることができるんです。この力がなかったら登れないんです。

「わが足すべりぬと言う時に、わが足波の下に沈みぬと言う時に、汝、われを支え給えり」

と。即ち、私の実存における因果応報を、没落へ行くとこの結果を、没落ではなく、引っくり返すところの別な法が働いて、別な法が、神のあわれみの法が働くんです。

神の憐れみの法則が、神らしき法則が働く。神らしき報復むくいとは何かというと、このあわれみの法則なんです。神らしき報いを、神らしき法則をそのまま現わした、神の報いそのものは何かというと、まさに十字架のキリスト、復活のキリストがこの神の報いの現われなんです。

●報復観念のぶち破り

しかし、神さまに依り頼まなければ、神さまに自分を明け渡さなければダメですよ。神に明け渡さなければ、神の法則はそのままずっと働いて、そのまま没落に行きます。没落に行く私たちの亡びへの私たちの歩みというものを、永遠の生命、栄光へと、救いへの歩みへと変える、この救いの法則、憐れみの法則。これが神らしき報いである。

パウロはイエスを迫害した。

「このいと小さき者を迫害したるは即ち我を迫害したるなり」

と。今のマタイ伝25章のように、

「何ぞ我を迫害するか!」



とパウロをつかまえて、引っくり返して、パウロを本当に救いにもたらして、神の栄光体、福音の土台石みたいなものに作り上げてしまつて、新約聖書の驚くべき礎石となした。これは神さまの法則は、とにかくパウロはどうしたって没落しなければならなかったのを、その角度をグッと逆に変えた。あわれみの法則です。神の法則には、神の報いには、憐れみの報いがある。それはマタイ伝5章から7章にかけてキリストの言葉をその角度からもういっぺん、皆さん、読み返してごらん下さい。

「霊の貧しき者」

というこの一点をすっかり魂の奥に置いて、これを読む時に、もうこれがスーッと読めるんです。さっきの例えば6章でも、

「²さらば施^{ほどこし}濟をなすとき、偽善者が人に崇^{あが}められんとて会堂や街^{ちまた}にて為すごとく、己が前にラッパを鳴らすな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報いを得たり。³汝は施^{ほどこし}濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。⁴はその施^{ほどこし}濟の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。」
(マタイ6・2〜4)

「施しをなす時、偽善者の如くあらざれ。祈る時に会堂や街でするような、己の前にラッパを吹くようなことをするな。右の手のなすところを左の手に知らすな。

さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん」

と。報いを求めない者に本当に報いがくる。そういうわけです。

いわゆる報復観念のぶち破りなんです、キリストは。即ち、ユダヤ人が今まで持っていた報復観念をぶち破つてしまつて、しかも、その法則を――横紙破りをしたのではない――もつと深い角度からこれを高い法則の世界に入れてしまふ。そして、その高次な法則が低次な法則をちゃんと掴まえているような構造になる。因果応報は貫きます。因果応報は貫くが、しかし因果応報をもう一つ大きな角度から、この憐れみの法則が、神さまに依り頼む時にはたらく。どんな時にも行き詰まりはない。失望することはない。

「どんな時にも、お前たち、その失望はない」

と。神さまの聖意靈法がある。憐れみの聖意靈法が働く。この憐れみの恵みの聖意靈法が働く。この憐れみの恵みの聖意靈法は愛の法則ですから、この愛の法則の中に自分を投げ入れる。そうしたら、いわゆる因果応報という法則から、神の別な法則の世界に自分が入れられてしまふ。

●神の報いは聖霊

黙示録の6章9節から、

「⁹第五の封印を解き給いたれば、曾^{かつ}て神の言のため、又その立てし証^{あかし}のために殺されし者の靈魂の祭壇の下に在るを見たり。¹⁰彼ら大声に呼ばわりて言



う『聖にして真なる主よ、何時まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐をなし給わぬか』

「どうして審判が来ないで悪がさかえて、このように行きますか」と言った時に、

11「ここにおのおの白き衣を与えられ、かつ己等のごとく殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との数の満つるまで、なお暫く安んじて待つべきを言い聞けられたり。」(黙示録6・9～11)

「福音のために労する人たちがまだあるから、その時の満ちるまでしばらく待つていろ」

と。審きは来る。審きは来るが、その因果応報は成っていく。義は義として立つて行く。大丈夫だ。けれども、立ち帰る魂はみな因果応報の世界からもう一つ高次な憐れみの法則の世界に入れられている。その法則の中に今度は自分が生きるようになって行くわけです。やっぱり、憐れみの法則の中でそれが祝福を受けていくわけです。これがこのキリストが開示してくださったところの贖いの法則の世界、報いの世界です。

イザヤ書の53章でお読みの通り、53章の4節に、

「4まことに彼はわれらの病患をおい我儕のかなしみを担えり 然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと

即ち、彼は報いを受けているかと思つた。

5彼はわれらの愆のために傷けられわれらの不義のために碎かれみずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり」(イザヤ53・4～5)

我らは愆のために傷つけられて、我らの不義の為に碎かれるのは、これは報いであるのに、逆に「彼」がそれを引き受けてしまった。だから、この報いの法則がそこでもって切り換えられてしまった。

キリストによつて恵みの世界に入れられている。だから、神の恵みの法則の世界に私たちが入れられたら、今度は私たち自身がこの憐れみの、贖いといった法則の体現者となつていかなくてはならない。私たちは人の罪を贖うわけにはいきませんよ。いきませんけれども苦しみを荷う。即ちそれは十字架を負うという角度です。自分たちがその憐れみの、

「汝ら己が十字架を負いて我に従わずば天国に入ることができない」

と。「十字架を負う」とは新しいこの贖いの法則の中に、法則を体現していくものとなつて行く。そうしたらば、その報いは大いなりという。さっきの、

「預言者たちも責められたりき。汝らも義の為にせめられるか。愛の為、義の為に責められるか。それならば、汝ら喜びおどれ、天国にて汝らの報いは大いなり」と。そこで、

「天国にて汝らの報いは大いなり」



という。報いは天国にて大いなんです、キリストの法則の中に入ってきたから。法則は現われるんです。しかしながら、現われるのは、やがて天国が、神の新天新地が来て、現われるばかりじゃなくて、今現に負いつつ現われるという消息がないものだろうか。報いは来ているんです。報いは何処にありますか。

「報いは求めません」

なんて言っても、ちゃんと報いは来ている。ここにもちゃんとこの報い、高次な法則が現われている。この十字架を負うとは、一体どうして負えるんですか。キリストの復活の生命が来てなくて、この十字架は負えない。御霊の生命が来ないと十字架を負うということは本当にやれない。十字架を負いながら本当に勝っていないければ、即ち私たちが永遠の生命を、キリストの御霊の生命を頂いているということは、これはやがて

「天国にて汝らの報いは大いなり」

という、その保証としてちゃんと来ている。

「御霊はその保証として与えられている」

と、パウロが言っている通りです。

ですから、神の報いは、究極の一点に持つて来るなら、私たちに来る聖霊です。この聖霊が本当に神さまの、神さまらしき報いです。自分を投げ出し、本当に自分をキリストにあつて無とされ、この無をいただきましたならば、そうしたらば、隠れたるに見給う汝は聞き給う、私たちの祈りを聞き給う。それは即ち御霊をもつて聞き給う。実に、

「この御霊の他、御霊の生命の他、何をか要せん」

ということです。

「この火燃えたらんには何をか要せん」

と、これが実は最大の報いです。天上天下、この御霊の他に、金剛石も真珠もない。

「善き商人は一切のものを売つてたった一つの真珠を求める」

と言った。私たちは一切のものを捨てて、ただ聖霊のキリストを迎えこれを宿し奉る。これが最大の報いです。神の神らしき報いは、私たちは自分を投げ出し、

「我が足すべりぬ。ああすべった、ころんだ者でございますが」

と言つて投げ出した時に、

「汝のみ手、キリストのみ手、我をつかまえ給えり」

という時に、この聖霊が来る。

● 仇を恩でかえす

だから、「詩篇の作者よ」と私は今度は逆に言いたい。この94篇の作者は、

「エホバよ^{あた}仇をかえすは汝にあり 神よ^{かえ}あたを報すはなんじにあり ねがわくは光をはなちたまえ」



その答えはちゃんと彼自らが18節で書いている。

「18されどわが足すべりぬといひしとき エホバよなんじの憐憫あわれみわれをささえた
まゐり 19わがうちに憂慮おもうわずらいのみつる時なんじの安慰なぐさめわがたましいを喜ばせ
たもう」

と言う。まだ旧約の世界ではつきりしませんけれども、「あなたの憐れみ、支え」というものが最大の、

「仇をかえすは汝にあり」

といて、汝は私に憐れみをもつて臨んでくださっている。これが本当は実は、大きな報いです。今度はそうなると、滑ったようなやつが、神さまに捉えられて憐れみをもつて報いられているではないですか。そうしたら、敵の滑りも、相手の滑りも、

「どうかあの人たちが滑らないように」

という祈りに変わっていくのが、今度はキリストの祈りです。旧約にはなかなかその祈りは出てこない。

「敵を愛せよ」

なんとなれば、神さまは悪しき者も正しき者も同様にこれを顧みて、陽を昇らせ雨を降らせておられる。相手が悪しき者であろうが、マイナスであろうが、プラスであろうが、

「神さまはプラスにもマイナスにも、同じ恵みを下さっている。その如く全かれ」

というんですから、相手が敵であろうが、味方であろうが、何であろうが、このキリストの世界の愛から来る。そういった相対的なものは消えてしまう。そして、

「彼らなすところを知らず、神さまゆるし給え」

とステパノの殉教の祈りが出てくる。仇を恵みでかえす。「恩を仇でかえす」と逆です。「仇を恩でかえす」、憎しみをいつくしみで返す。これが本当にキリストの報復むくい、キリストの恵みです。キリストの報いは、このような法則の世界です。あの『曠野の愛』の24号「1956年春季号『ブルンナー、グラハム両博士』」に、

「やどかさぬ人の心のなすけにておぼろ月夜の花の下伏し」

という蓮月尼のうたを引用した。旅をして行って、陽がくれて、どこかに宿を得ようと思つて、戸を叩いたところが何処の人も泊めてくれない。仕方がなしに野末の木の下に一夜を宿した。そうしたら、おぼろ月が出てきて、その木がまた桜の木であった。それで花の屋根の下で、むしろ、つれなき人たちの町の、そういった拒んだ人たちの方を向いて合掌して、この情なき人々に対して感謝の念仏をささげた。自分を退けた人たちに、

「ああ私はここでこの花の下で、おぼろ月夜で眠れるようになった」

という、仇を恩の恵みの憐れみの暖かい心でもつてかえしてうたった歌がこれです。

この仇を恩で返すような、そういった角度が神的法則です。我々はキリストを十字架につけました。しかし、この私たちのこの罪の仇を、復活の生命、聖霊の生命という恩をもつ



て、憐れみをもって、生命をもって返してくださいだったのがキリストの報復であります。このキリストの、神の報復むくいというものは、これにぶつかって私たちは初めて、私たちの心は碎けるのです。そうでなければ、私たちは碎けない。この恵みを拒んだら、何処に行つてよいのか。キリスト教会で十字架が、教会の尖塔にはよく十字架が飾つてあります。時々私は電車の中からでも、そこに教会があつたかと思つて見る。十字架を見ると、私は瞑目して電車の中でも祈る。

問題は、我がうちに十字架、霊の十字架という、罪を生命をもって、罪を義をもって換え、死を生命をもって変えしめ、憎しみをいつくしみ、愛をもつて返してくださいだったところの、新しい報いの法則が出てきた。キリストにおいて初めて神的な報いが出てきた。これが山上の垂訓において言われ、イエスの言々句々、彼のすべての行、これにおいて現われている。このような逆法則をもつて報いられてきたのが、神さまの法則の深くそこにクロスした法則をそこにつくつて、そして最後の日に向かつて進んで行く。これを拒むものは仕方がない。そういうのが、私たちが詩篇94篇を題材にして学んだ、この全聖書から学びとるところのものであると思う。だから、

「エホバよ、仇をかえすは汝にあり。神よ、仇をかえすは汝にあり」

という祈りは、その光に照らすと、

「神さま、実に私たちは大きな間違いをしていた。あなたは、我々の思いにすぎたところの仇の返し方です。実に私たちのこの罪の仇を、貴神あなたは十字架をもつて返してください。私たちは自分を義認あやまらしていて、とんでもない間違いでありました」ということになるわけです。そこで全く私たちは、

「わが足すべりぬ」

と。キリストに逆らつたのも、滑つたことです。

「滑つたときに返つて汝の報いの憐れみが我々を支えた」というのです。終わります。

